



校長会



No.39

三重県小中学校長会 広報 第39号

●発行●三重県小中学校長会 津市桜橋2-142 三重県教育文化会館内 TEL 059-227-7011 E-mail mie-kotyokai@galaxy.ocn.ne.jp
●編集●三重県小中学校長会 広報委員会 ●印刷●光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1 TEL 0598-29-1234



私の学校づくり

「新しい平田野中学校の伝統づくり」のはじまり



鈴鹿市立平田野中学校
校長 前川 明久

長年の夢であった新しい平田野中学校が九月に開校した。前身の新制中学である第二中学校から数えて三度目の移転となる。また、昭和五十九年には千四百人を超えるマンモス校となり、東部地域一帯を分離し、創徳中学校が新設された。これは鈴鹿市の中でもとりわけ平田町を中心とする商業、工業の発展が極めて急速であったことを物語り、学校もその時々時代の求めに応じてその姿を変えてきたのである。そして今年、国府の地で新しい平田野中学校がスタートした。

新しい伝統づくり

本校では移転を契機に子どもたちが将来、郷土鈴鹿のものづくりに携わって活躍できるように学校づくりを進めたいと考え、昨年度「平田野中ものづくり人材育成プログラム」を立ち上げた。このプログラムでは電子黒板やタブレット端末等のIT機器を使って子ども

もたちの興味関心を高めるICT教育を推進するとともに、ロボット製作やロボットコンテストなどへの参加、地域の小学校へのものづくり支援出前授業などに取り組んだ。今後は新しい平田野中学校の伝統づくりとして、子どもたちがこうした取組を通じて科学やものづくりに興味を持ち、将来の鈴鹿を担う人材となるようキャリア教育の充実にもつながる学校づくりを進めたい。

学校づくりは人づくり

学校は人を育てるところであることはいうまでもない。校長として学校づくりに何が大事かと問われたら、突き詰めると「生徒を第一に考え、学び続ける教師」と答える。古くから教育の不易の部分として語られてきた「教育は人なり」という言葉が意味するいわゆる教育者としての資質の大切さを感じずにはいられない。私一人では何事もなし得ないのである。

今日的課題の克服に向けて

全職員で取り組む 生徒指導を

大紀町立大宮小学校

校長 伊藤 仁 志



「〇〇さんのお母さんに、来年も担任してって言われた。」と、職員室からの話し声が聞こえてきた。学級の問題をひとまず解決した安堵の声である。

本校では子どもたちに問題が起きると、職員室で「今日、こんなことがあって…」と気軽に話すことが多くなってきている。すると、他の教師が「どういうこと？」等理由を聞いたり、「こうしたらいいのでは。」とアドバイスをしたりする。放課後の職員室で会議でもないのにそんな話が続く。話が終わると、担任は解決の方向と家庭訪問のタイミングを判断し、管理職に相談にやってくる。そして、解決に向かって動きます。このと

きもそうだった。担任が家庭訪問をして、母親にいきさつや解決に向けての話をした。その後両親で話し合った時、父親が「自分が担任でもそうする、いい対応だ。」と言ったらしい。母親は担任を信頼して「来年も担任して…」と言ったのである。

最近では学力向上の声に隠れがちであるが、いじめに関する問題や子ども同士のトラブルも大きな問題として残っている。問題が起きた時、一人で抱え込まない、当事者だけを一人にしない、ということが実を結んだ場面である。

また、本校には「バスレーンに入らない」という、ちよつと聞き慣れない決まりがある。運動場の外周に沿ってスクールバスが通るバスレーンが設置されているため、校舎から運動場に出るときは必ずバスレーンを横断しなければならぬ。そこで、横断帯を二方所設け、運動場への行き来の際に通るようになっている。そして、ポールを追ってレーンに入ったり、横断帯をきちんと通らなかつたりする児童には、すぐに注意を与える。これは普段バス通学をしている

児童に、帰宅してからの道路の横断や道路への飛び出しに気をつけさせたいという思いで行っている指導である。この指導を職員十数名が共通理解のもと、同じ対応をしている。担任外の児童であつても見かけたらすぐに注意する。そして、後で「こんなことで〇〇さんに注意したよ。」と、担任に一声かける。担任は、他者から自分の学級の子が注意されたのを嫌がることもなく「ありがとう。後で学級でも言っとくわ。」と返す。全校児童を全職員で指導に当たるといふチーム大宮としての取組の一端である。「廊下を走らない」「挨拶をする」等に対しても同じである。

本校は、児童数八十八名の農山村にある小規模校である。一見、何もなさそうな学校に思えるが、三〜四年前までは、保護者からの苦情も多かったと聞いている。また、子どものトラブルが親同士の関係まで悪化させていったとも聞いている。その後、徐々に学校も落ち着きを取り戻してきている。

前述のように、職員が一丸となつて取り組む姿勢ができてきている。職員同士を繋ぐ要となり、他の面においても一丸となつて指導に当たれるようにしたいと思つている。何も目新しい取組はない。しかし、職員が少ないことは、全

員での共通理解もしやすい、全員が同じ方向を向いて指導に当たりやすいということでもある。児童数が少ないということは、一人一人に目が行き届きやすいということでもある。それらを、小規模校の強みとして、全職員が地道に根気強く生徒指導に取り組んでいくようにしていきたい。

読書に親しむ 子どもたちを育てる

紀北町立矢口小学校

校長 岡 本 悟



近年、様々なメディアが発達し普及する中、幼児期からの読書習慣の未形成などにより、子どもの「活字離れ」や国語力の低下、また対話による問題解決能力の低下等が指摘されています。

しかし、子どもの読書活動は、言葉を学び、考える力を養い、感性や表現力を高め、また幅広い知識などを身につける上で欠くことのできないものです。

十一月の集会でのごとく、「皆さんは『灯火親しむの候』というこ

とばを聞いたことがありますか？これは、明かりの下で本を読む頃になったよということです。皆さんは、本を読むのとテレビを見るのとでは、どちらのほうが時間が多いですか？実は、世界の国々の中で日本人ほど長い時間、テレビを見ている国民はいないと言われています。テレビは他の国々のこと、自然や動物・植物のことなどが見ているだけで分かります。でも、見ているときは、あまり何も考えていないでしょうか？想像しなくても見るだけで分かったような気になります。本を読んでいるときはどうでしょう。登場する国や町、人物など自分で想像しながら読み進めていくでしょう。読む人が百人いたら百通りの想像が生まれます。また、自分が物語の主人公になつて活躍することもできます。学校の図書室にはいっぱい本があります。本を読んで何を、どんなふうを感じるか、それは皆さんの自由です。本を読みながら、自分だけの素晴らしい世界を描いてみませんか。」という話をしました。

全国学力・学習状況調査からも学校が終わつてからの時間の過ごし方として、読書よりテレビを見たり、テレビゲームやパソコン、携帯のゲームをしたりする方が多いという結果が出ています。特に

学年が進むほど、読書時間が減少している傾向にあります。このような現状を踏まえ、子どもたちにたくさんの本を読んでもらおうと、いろいろな取組をしています。学期一回の読書月間を設け、図書委員による新刊の紹介や各自の目標を決めての取組、特別非常勤講師を招いての本の読み聞かせ等を行っています。でも、読書月間中はそれなりに読みますが、その後は続かないといった一過性のものになりがちです。

本校では、七年前から「朝の十分間読書」に取り組んでいます。それぞれのクラスでの取組の様子は定着してきているように思いますが、形式的になっている面もみられます。読書は、いくら口で心を豊かにする」とか「想像力を培う」とか「学力が身につく」とかというお題目を唱えてみても、なかなか子どもたちに根づいてはいきません。そこで、読書に親しむ子どもたちを育てる最前線にいる教師自身が、「読書」に対する姿勢を改めて考えてみようというところで、教室で子どもたちと一緒に本を読んでみようという取組を年度途中から始めました。ひとつの試みのつもりでありましたが、思いがけぬほど反応はよかったです。どの学級においても子どもたちが黙々と本を読んでいる姿が見

られ、一限目の授業にも集中した状態で入れる等の成果が見られました。

今後は、子どもたちの読みたい本を備える等、子どもたちが「よい本」に出会えるような対策を講じるとともに、子ども読書の幅を広げ、読書の質を高めていくように努めていきたいと思えます。

「学び続けようとする力」を育むために

四日市市立三重中学校
校長 廣瀬琢也



本校の子どもたちの生活実態を見ると、学習環境が整っていないか、学習習慣が定着しにくかったりなどの教育的に不利な環境に置かれている子どもたちが少なくありません。中には、上級学校へ進学することの意義を見出せなかつたり、自分の将来の姿を描けなかつたりする子どもたちもいます。

また、人間関係を築いたり、コミュニケーションをとったりする

力の育ちが不十分な子どもたちもおり、適切な友達とのかかわり方が分らないことからトラブルになることも少なくありません。

教育の格差が貧困の連鎖につながることを危惧する新聞の連載記事を目にしました。この問題は、三重中学校区においても例外ではなく、本校の子どもたちに現れている課題の根源的なものと捉えています。「自らの力で未来を切り拓くことができるよう学習の機会を保障すること」がこの問題の解決のための道筋であると考えており、本校の子どもたちにも生涯において「学び続けようとする力」をつけさせる必要性を実感しています。

昨年度、四日市市では各学校において策定する「学校づくりビジョン」の中間見直しの時期にあたり、本校では、平成二十六、二十七年年度の「学校づくりビジョン」に掲げる目指す学校の姿を「笑顔いっぱい学校」としました。私の願う「笑顔」は、「子どもたちが将来において『自己の個性を生かし、他者とともに協調し、主体的に社会に関わろうとする社会人』として成長した喜びを感じる笑顔」をイメージしています。

将来につながる本校の三年間が子どもたちにとって本当の「笑顔いっぱい学校」となるよう、三

つの柱を「①進路保障」「②絆づくり」「③保護者・地域との協働」とし、次のような取組を進めています。

①進路保障

進路保障にいちばん必要な力が学力であることは言うまでもなく、「学力向上」は本校の大きな課題であり、その改善に向けた取組を進めています。

「わかる」「できる」が実感できる互いに学び合う授業、つくりを進めるとともに、基礎基本の定着を図る「学力向上タイム」、家庭学習の定着を図る「自主学習ノート」に取り組んでいます。また、学習したことが実社会につながっていることを子どもたちが実感できるように専門性の高い企業・専門機関と連携した授業も行っています。

②絆づくり

本校では子どもたちの自尊感情が低い傾向にあることも課題となっています。この自尊感情は「学び続けようとする力」の大きな支えとなるものであると考えています。

子どもの理解と支援について研修を深め、子どもたちの自尊感情を支える取組を大切にしています。また、ソーシャルスキルトレーニングやライフスキル教育の手法を取り入れながら、学校・学級がどの子にとっても安心して過ごせる居心地のよい場となるための取

組も進めています。

③保護者・地域との協働

本校には茶室があり「茶道」に加え、「書道」「箏」の授業を外部の専門家に指導いただき、落ち着いた「和の心」を子どもたちに味わわせていただいています。また、PTAバザーに子どもたちが活躍できる場を設け、子どもたちの自己有用感を支えていただいています。

本校の校区は三重西小学校区と神前小学校区の一部にまたがっています。両地区とも地域住民同士のつながりや地域のまとまりを形成しようとして積極的に活動されている方々がたくさんいます。これまでも地域の花いっぱい運動や高齢者福祉・里山保全の活動に子どもたちが関わる機会をいただいています。

本年度、市教育委員会からコミュニティスクールの指定を受け、両地区でのこのような活動をつなぎ、子ども支援のネットワークづくりを進めようと保護者・地域のみなさんとともに取り組んでいます。その一環として新たに地域ボランティアの指導による三年生の放課後学習会を立ち上げていただきました。

今後、学校・保護者・地域が一体となり、子どもたちに「学び続けようとする力」を育んでいきたいと思えます。

県教育委員会との懇談会

「学力向上の取組」「働きやすい職場づくり」を中心に

平成二十六年十一月十四日（金）
於：県教育委員会室

小中学校長会役員、学校経営委員長、女性校長教頭会会長と県教育委員会教育長および幹部との懇談会が、県教育委員会において行われました。その概要について本号で紹介いたします。

下村会長、山口教育長の挨拶の後、山口学習支援担当次長から「学力向上等の施策」について、また福永教職員・施設担当次長から「教職員配置の状況」について、それぞれ資料を基に説明がなされ、まず「学力向上の取組」をテーマに懇談に入りました。

（一）学力向上の取組

○校長が授業を見て回ることが効果につながることは承知しており、努めて実行してはいるが、短時間の参観では効果は期待しにくく、かといって長時間となると校長の職務上難しい面がある。管理職の仕事の軽減を図っていく必要がある。また、正規教職員の数が少ないという状況

は、初任者の資質にかかる採用面での改善や後補充の講師が不足していることなど、学力の現状にも関連しているのではないかと感じる。（校長会）

○子どもたちに自信を持たせることはとても大切なことと受け止



下村会長あいさつ



山口教育長あいさつ

めている。そのために校長がリーダーシップを発揮し、厳しい現状を何とかしていきたいとの思いで、すべての校長が前向きに進めていかなければならないと考えている。全国学力・学習状況調査結果を真摯に受け止め、加配等の効果的な活用を工夫するなど、支援が必要な子どもへの対応時間の確保にも努めている。（校長会）

○みえスタディ・チェックや検査の回数を増やすことで結果の向上を求めることについては疑問を持つ。中学校においても授業づくりを主題にして公開を進めてきたことで成果が上がっていると思う。落ち着いた雰囲気の中、教師と生徒の良好な関係を築きながら、生徒が学び合う姿勢も生まれている。何より普段の授業が勝負であると考えており、継続していくことがさらに結果につながると考え頑張っている。（校長会）

○授業を見る時間が取りにくいという点について、忙しいのは承知しているが、次年度には新たな人事評価制度も試行される。その点においても授業を見ることは必須であり、そのための時間づくりを検討していく必要がある。また、教員の資質向上も課題であり、教員選考にお

いても、本年度、受験者の集団討論形式の変更など工夫改善をした。今後もさらにブラッシュアップを図っていきたい。（県教委）

○各校それぞれに現状に応じた取組をしていただいている。そんな中、今一度何が課題でどんなことが不足しているのかをチェックしていく必要がある。その上で、県教育委員会学力向上緊急対策チームが今月創刊した「三重の学Viva!!」に掲載したような県内の好事例、先進的な取組を互いに共有し、行政と学校が一体となって進めていきたい。県教育委員会も市町教育委員会と共に学校へ出向き、現場の要望に応えていきたいと考えている。また効果の上があった事例を提供願いたい。（県教委）

○補充学習を拡充したいが、集団下校で児童の安全確保の難しい中、下校時間の繰り下げについてもPTAの協力も得ながら取り組んでいる。全国学力・学習状況調査の結果の弱みを踏まえた研修の見直しを図りながら、保護者と連携した家庭学習の取組なども進めていきたい。（校長会）

○学び合い共同学習を中心に研究指定を受け、外部からスーパーバイザーも招いて公開研を継続している。また、子どもたちが安心でき

るきめ細やかな対応により学力が向上し、子どもの自信や自尊感情が高まってきた。さらに、自主学習ノートを子ども同士で点検し合うなど、子どもの自発的な活動が教員のやりがいにもつながっている。（校長会）

（二）働きやすい職場づくり

○新しい職や新たな人事評価制度の設計過程で校長会の意見も聞いていただいて有難い。しかしながら、新しい職の導入については現場として大変唐突な感があった。また、新たな人事評価については絶対評価で捉えるのはよいが、給与に関わる点と原資の関係で相対的なものになることを懸念する。評価に対する苦情についても、第三者的な立場の導入など課題も多いと思われる。（校長会）

○新しい職に関する情報が遅かったことに関しては大変申し訳なく思っている。この職については関係機関等との丁寧な調整や人事院勧告を待つ必要があったこと等を理解いただきたい。一方、新たな人事評価については今後情報も逐一提供し、課題について丁寧に対応しながら制度設計をしていきたい。（県教委）
○遅くまで学校に残っている女性のベテランも多く、勤勉な働きぶりは職場の宝である。しかし、



介護等家庭の事情から早期退職する者も多く、その実情を十分に理解してほしい。また、女性管理職の登用についても先進県では新しい職との関連性が高いというデータもあるのでは是非参考にしてほしい。(校長会)

○各学校現場で校長先生方のマネジメントが成果につながっている。その一つ一つの好事例をいかに共有していくかが大切である。また、懇談の中に管理職の声掛けで職場が和むとか、女性管理職を増やすことなど良い話を幾つか聞かせてもらった。明るく前向きに県全体で取り組んでいきたい。是非今後とも協力願いたい。(原教委)

出席者

県教育委員会

教育長 山口千代己

副教育長 信田 信行

教職員・施設担当次長 福永 和伸

学習支援担当次長 山口 顕

育成支援・社会教育担当次長

長谷川耕一

研修担当次長 中田 雅喜

教育総務課課長 荒木 敏之

市町教育支援・人事監 井坂 直樹

市町教育支援・人事監 深見 充弘

小中学校教育課課長 鈴木 憲

学力向上推進監 山田 正廣

県小中学校長会

会長 下村 純也

副会長 川岡 均

富内 修身

大西 学

藤林 敏治

鈴木 豊嗣

学校経営委員長 鈴村 豊嗣

県小中学校女性校長教頭会会長

老谷 洋子

西浦 昌宏

掛橋 純

近田 芳久

中川 正生

広報委員長

副委員長

事務局長

事務局次長

本部役員だより

一年を振り返って思うこと



三重県小中学校長会

小学校部会長 川岡 均

平成二十六年度、「未来社会に生きる子どもたちのために、今すべきことは何か」について、これほど深く考えたことがありませんでした。社会が変革する速度は極めて速く、教育界においても大きな改革が次々になされました。その度に、校長や校長会としての対応策、決断力が試された年でした。

国においては、教育再生実行会議を中心とする教育改革が進められ、三重県においても三年目を迎える「みえの学力向上県民運動」の展開、全国学力・学習状況調査結果の公表をはじめ、「みえスタディ・チェック」が学校現場に導入されました。また、「小中学校における新しい職の設置」「新たな人事評価制度の導入」など、新たな制度が入ってきます。

私たち校長は、激しく変化する社会にしっかりと目を向け、先を見据えたビジョンを持ち、創造性豊かにリーダーシップを発揮して、学校経営を進めていかなければなりません。今、まさに校長の経営力が問われているのです。

十二月の臨時郡市会長会議において、「児童生徒の学力向上」について話し合いました。県内各々の学校現場においては、日々精進努力して、児童生徒・保護者・地域との関係を好ましいものに創り上げ、適正で充実した教育活動を展開しています。しかし、全国学力・学習状況調査結果を受けての歯がゆさ、「このままでは、子どもたちや教職員が自信を持ってな

い。なんとかしたい。」という悔しい率直な思いや意見が出され、各郡市の会長が互いに熱い思いを共有し、今後とるべき策を考え合ったことが、価値ある時として思い出されます。

このように、三重県小中学校長会は、教育の変革期にあることを認識した上で、組織力を生かし学校現場からの声を大切に、関係機関や関係団体との連携、会員相互の連帯のもと、諸課題の解決に向け、県教育委員会をはじめ県内の教育関係団体との話し合いを積極的に進めてきました。その際、今年度は特に、専門委員会や部会等での活動がより活発に行われるよう意識しながら進めてきました。

今後においても、校長会が果たすべき役割を問い直すとともに、教育に関わる諸課題に校長会全体で議論を重ね、組織全体で立ち向かっていかなければなりません。真摯な研究と実践を積み重ね、本県教育の振興を図り、県民の信託に応えていきたいものです。

会員の皆様には、この一年、三重県小中学校長会の諸活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

私の薦める二冊

一人光る、みな光る、 何も彼も光る

亀山市立亀山東小学校

校長 佐藤 和夫



私は、本校に赴任してから毎日続けていることがあります。子どもたちの登校時間に、校門や学校付近の交差点で、子どもたちを迎えながら、「おはよう！」とあいさつをしています。ほとんどの子どもは、私のあいさつに対して、「おはようございます。」と返してくれます。私の姿を見つけて、子どもの方からあいさつをしてくれる子もたくさんいます。でも、友だち同士のおしゃべりに夢中になっっている子や、視線を合わせてくれない子もいます。中には、朝から体調や気分が悪くて、だれとも口を利きたくないと思って登校している子もいるかもしれません。その気持ちもよくわかりますが、地域の方から、「あいさつが全くできていない。こちらが言っ

ても言わない子がいる。」という叱咤激励のお言葉をいただくこともあります。

数年前に、『凡事徹底』という本を読んだことがあります。著者は、イエローハットの創業者である鍵山秀三郎という方です。この方、最初は、自転車一台で降四十数年続けたことがありましたが、毎朝、早く会社へ行つて、社屋を清掃、整理、整頓しました。さらに、会社の前の道路も掃いてきれいにしました。まずは、一人で、自分から、平凡なことを非凡に努めることこそ大事で、そのことが周りの人や組織全体に広がって、よい影響を与えていくという信念のもと続けました。今回『凡事徹底』を読み返してみても、四十年以上も続けた筆者の足元にも及びませんが、甚だ微力ながら、自分ができることをこれからも粘り強く続けていきたいと心新たにしました。

先日、校内巡視していたら、トイレのスリッパをそろえている子を見ました。その子にとっては、散乱しているスリッパをそろえることは当たり前の行為なのかもしれませんが、きつと、ごみが落ちていたら、さつと拾う子でしょう。私たち大人が率先垂範して、そんな子が二人、三人と増えていく学校にしたいものです。

随想

健康第一！

桑名市立日進小学校

校長 木村 洋子



三十八年の教員生活が終わろうとしているが、何度指を折って数えても、十年間分の子どもたちしか思い出せない。管理職として十二年、そう言えば社会教育主事として七年、適応指導教室に五年……。

いろんな仕事をしたから、三十八年が短く感じられるのだろうか？

今振り返ると、社会教育主事の七年間は婦人会・公民館の担当で、管理職になってからの地域とのつながりに大いに役立った。また適応指導教室での生活は人間として学ぶことの多い五年間で

あった。様々な理由から不登校になった子どもたちは、通い始めた頃は心を閉ざしがちであった。その子どもたちに自分の方から心を開き、自分の生き方や考え方を言葉で伝え、「こんな自分でもまわりの人の助けで、何とか楽しく暮らしているよ」というメッセージを伝えてきた。どの子も優しく、様々な体験活動や私との気軽な話の中で徐々にエネルギーを蓄え、自分から学校へ戻っていった。

管理職になってからは「健康第一。とにかく元気で毎日学校にいたることが大切」という先輩からの言葉を肝に銘じて、二回のインフルエンザとノロウイルス感染で数日休んだ以外は、十二年間ほとんど病気をしなかった。特に最後の二、三年の「健康おたくぶり」はすごいものだった。就寝前の健康儀式的忙しいこと。ヨガ、お灸、足の裏をたたく、足首を回す、耳の後ろを押す……。ぼけ防止のための毎日の英語の勉強。低カーボの食事。

三十八年間、一度もいやだと思っただけもなく、楽しく仕事できたのは、生来のプラス思考と強運のためと誤解していたが、周囲の方（職場・先輩・友人・家族）に私の知らないところでも多大な援助を得ていたのだと今となっては分り感謝している。

あと三か月、健康に留意して、

今ある課題に取り組みたい。そして退職後はお世話になった桑名市に何かの形で恩返しをしたいと思っている。

教師生活を振り返り

尾鷲市立尾鷲中学校

校長 神保 方正



退職の年を迎えたにもかかわらず、まるで来年度も引き続き、仕事をしような気持ちで日々を過ごしています。

昭和五十四年四月、尾鷲市立九鬼中学校を振り出しに教師生活を始めました。教師を目指した理由は、自分のしてきた部活動の指導をしたいという思いだったように思います。しかし、命じられたのは男子バレー部顧問。しづぶ始めた顧問ではありませんが、当時の生徒のおかげで初年度からその面白さにすつかりのめりこみ男子顧問と女子顧問、合わせて二十五年も続けることができました。この間に、たくさん先輩や同僚から顧問としてではなく教師としてのあるべき姿を教えていた

きました。このころに自分の教師としての考え方の基盤ができ、成長できたように思います。

例えば、すばらしい指導や学級経営をしている先生の真似をしてもうまくいきませんでした。なぜだろうと考え、話を聴くうち、叱る場面になる前に生徒から信頼され頼りに思われるまで生徒一人ひとりを大事にする姿があることを教えてもらいました。叱るという表面だけを真似しても何も真似したこととはならず、水面下でしっかり足かきをして、生徒から絶対の信頼を得ているからうまくいくのだということ学びました。

私の教師としての基本は、このように部活動を通して他校の先生方との交わりと校内で放課後や休憩時間に先輩の先生方より授業について示唆いただいたことよって身につけてきたように思います。昨今、生徒のコミュニケーション能力の低下とその育成が大きな課題となっていますが、教師もしかりかもしれません。一人ではたいしたことができません。他の先生方からたくさん学ぶことを、その中から実際に自分もやってみることで、新たな気づきが生まれます。その繰り返しによりようやく自分流ができると思っています。つらいことがたくさんあったはずなのに、不思議と楽しいことばかり思い出される教師生活でした。

あの時、あの人

地域に育まれて そのバトンを次の世代に

松阪市立第一小学校

校長 松本吉弘



松阪公園の木造の建物で版木を手にした少年期時代の思い出は、誰もが比較的自由に触れていた風景の記憶の中にあります。今は本居宣長記念館の収蔵庫の中に永久に保管される宣長の一万六千点あまりの資料の中の一つになっています。

本居宣長は、今からおおよそ二百五十年前の人ですが、今もなおその業績の学問的価値は、衰えることがありません。江戸時代の出版文化は飛躍的に伸び、山桜で造られた宣長の版木も、摺師の手によって黒光りを発しています。松阪市の全ての子どもたちは、四年生で「本居宣長」、五年生で「松浦武四郎」、六年生で「蒲生氏郷」を学びます。吉田松陰の明倫小学

校や賀茂真淵の県居小学校というように、松阪市内である一校が飛び抜けて戦前から一人の人物を扱っていたとしたら、市内の子どもたちも同時に学習をするということとは、不可能であったことでしょう。

急激な社会環境の変化の中で人と人の関わりが希薄になり、家族や地域社会と関わって自分を磨いたり、子どもたちが遊びあつたりする機会が減少しつつある中、自分たちが育ってきた地域を大切に守っていくとすると、地域に貢献しようとする態度を養うことの重要性が一層高まっています。生まれ育った郷土は、人間形成に大きな役割を果たすとともに、一生にわたる精神的支えや、心の拠り所となると考えています。つまり、①子どもたちの豊かな心を育む ②地域社会の発展に貢献する意欲を喚起 ③異なる文化や歴史を理解する態度の育成 ④地域のことを語ることでできる人材の育成 ⑤伝統文化の継承といった観点からも重要です。こうしたことを踏まえ、地域の文化、歴史、産業、人材など、身近な教

育資源を積極的に活用した郷土教育の推進が、次代につながるかと思っています。

「ひとすじの道をもて」

名張市立桔梗が丘中学校

校長 福田徳生



ているのか。これから生涯教師として生徒と向き合っていくには、何ももたないままではいけない。これという周囲からも自分自身をも認めるひとすじの道というものをもつていかねばいかんよ。」とさりげなく諭されたことが今でも脳裏に焼き付いています。

私は、今を去ること三十五年前、昭和五十五年四月に新卒で奈良県の国語教師として山間僻地のS中学校に赴任しました。新採一年目の私は、教科指導・生徒指導・部活指導等何をとっても中途半端な新米教師でした。わずか百名余りの全校生徒の中に若い情熱をもって入り込めない自分がありました。何となく一年が経過し、二年目を迎えた時に、M校長が同じ郡内の小学校長から転任して中学校に来られました。M校長は、お会いしたすぐに私の教師として半端なままの姿を見抜かれたように感じました。歓送迎会で酒を酌み交わした時に、M校長は、すかさず私に、「君は一体何を武器として生徒に向き合っているのか。これから生涯教師として生徒と向き合っていくには、何ももたないままではいけない。これという周囲からも自分自身をも認めるひとすじの道というものをもつていかねばいかんよ。」とさりげなく諭されたことが今でも脳裏に焼き付いています。あの頃の私というのは、もともと高校の書道教師を目指して本県の高校書道の採用試験に何度か挑戦では、採用枠が少なく挫折を重ねていました。小学生の頃、書家としても著名な上出軒山先生が転任して来られ、書道クラブで初めて書の手ほどきを受けてよりこのかた続けてきた道があるではないかと、この時確信しました。当時、奈良県では小中学校での書写教育が盛んで、私も郡内の研究会に自主的に参加し、中学校での書写教育にひとすじの道として極めていこうとこの時思いました。四年後に本県に採用され戻っても、この思いは変わらず、名張市内の小中学校で、書写の授業において、毛筆を硬筆に関連させて児童生徒が日常生活に活用させていくスキルをライフワークとして研究し実践してきました。あの時のM校長の「ひとすじの道をもて」の一言がなければ、私は中途半端なまままで終えていたと思うと、M校長との出会いを感謝せずにはおれません。

地区校長会だより

伊勢市小中学校長会

伊勢市では、平成十七年に旧伊勢市・度会郡三町村（二見町・小保町・御園村）が合併し、現在二十四の小中学校で約六千八百名の児童を預かっています。合併後は地域の特色や各学校の培ってきた風土や文化を大切にしながら、それぞれの小中学校が伊勢市の小学校としての一体感を大切に教育活動を推進してきました。しかし、伊勢市においても近年どこの地区でも見られるような児童数の減少による学校の再編成の必要に迫られています。併せて東日本大震災を教訓として、地震、津波等の災害に対する児童生徒の安心・安全の確保及び地域の防災拠点としての機能の強化という側面から、学校の適正配置が進められています。具体的には、伊勢市立小中学校適正規模化・適正配置基本計画に沿って、三期に渡って学校統合計画が提案されています。現在はその第一期に当たり十一の小中学校が五校に、四つの中学校が二校に統廃合される計画が進められています。

今までの各学校のよさを引き継ぎながら新しい学校や学校を支え

ていただく組織や地域をどうやって創り出していくかが、大きな課題となっています。

伊勢市小中学校長会は三月を除く各月に一回定例会を開催しています。市教育委員会の所管事項の指示連絡に引き続き、校種別に分かれて、先ほど挙げたような当面の課題について協議したり、情報交換を行ったりしています。

校長として決断を下さなくてはならない場面は多くありますが、そんな時にこの校長会の連携は大きな心の支えとなっています。今後も、切磋琢磨しながら個々の校長が自らの技量、見識を高めていけるような校長会を目指していきたいと思えます。



員弁郡市校長会

員弁郡市校長会は、員弁郡東員町といなべ市藤原町・北勢町・員弁町・大安町の二十一小中学校と六中学校の二十七人の校長で構成されています。員弁郡市は、北部・西部が岐阜県と滋賀県に接し、東部・南部は桑名・四日市圏に接しています。北に多度山地、西に鈴鹿山脈をいただき、中央を流れる員弁川を挟んで緑豊かな自然と平野に囲まれています。なかでも、鈴鹿国立公園内にある藤原岳は全国でも屈指の「花の山」として、年中登山客が絶えることなく、また、同公園内の竜ヶ岳がむす宇賀溪も鈴鹿の滝の景勝地として知られていますし、桜が満開のころ、猪名部神社で行われる「上げ馬」は、広く県民に知られています。

「いなべ」は、約千三百年前の奈良時代に始まり、当地域には物部氏の支系・猪名部族が住居していたころから、郡名が「猪名部」と名づけられました。その後「員弁」と表記されましたが、その歴史の長さが裏付けられています。

そうした員弁の地で、私たち郡市校長会は、子どもたちに「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育み、主体的に自らの未来を切り拓く力をつける取組をしています。



職員をまとめ校長としての指導性を発揮するために、年間に十三回の会議を行っています。うち五回はテーマ別分散会。「学力向上」「学校組織・運営」「特別支援」「家庭・地域・異校種等の連携」年度末には、分科会別まとめの全体研修会を行い、還流学習を行っています。

また、講師を招請し、情報モラルを学ぶ全体研修会を行ったり、津市立西が丘小学校（米川武宏校長）へ研修視察で訪れ、学力向上に向けた学校づくりとその実践、校長のあり方と指導性について学びました。

二十七名がお互いに、三十年以上、員弁とともに教えられ育てられてきた者ばかりです。校長としてのやりがいや悩みを共有し、この地のさらなる教育づくりに貢献し、恩返しをしていきます。

編集後記

まだまだ寒い日が続いておりませんが、日毎に陽が長くなり、春を実感します。学年末となり、卒業式や修了式を目前にし、その準備や学習の締めくくりに大変あわただしい日々をお過ごしのこととお察しいたします。

今年度は、三重県教育界予てからの課題であった学力向上対策において、大きな動きがありました。みえスタディ・チェック、土曜授業、指導主事の学校訪問等を従前までの取組に加えて新たな対策として実施されました。何をもち「学力」があるという判断をすることについては様々な考え方があります。しかし、現状では全国学力・学習状況調査結果からうかがえる「学力」ということを避けては通れない状況です。自分自身を大切にしたい、たくましく生きていける子を育成するという三重の教育を継承発展させていくためにも、教職員一丸となって眼前の課題を克服していかなければなりません。

さて、「校長会みえ」も計画通り三年三回の発行を無事に終えることができました。多忙極まる中で原稿執筆にご協力をいただいた皆様、心より感謝申し上げます。課題克服に情報共有は不可欠であり、これが三重県小中学校校長会の連帯へとつながります。今後も紙面充実を図り、ご愛読いただけるよう努力いたします。